
天変地異と俺～異世界へようこそ～

宮原葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天変地異と俺〱異世界へようこそ〱

【Nコード】

N0345W

【作者名】

宮原葉月

【あらすじ】

天変地異―カタストロフィーと呼ばれた少女と、俺がある日突然異世界に行ってしまうお話。

ぷろろーぐ

俺の名前は師走^{しわす} 春樹^{はるき}。何処にでもいるごく普通の高校生では――
―なかった。

今は、訳ありの高校生という事にしておいてくれ。

俺の隣にいる彼女の名前は天地^{あまち} 麻衣^{まい}。10人に8人ぐらいが可愛い、と答えるぐらいの美少女だ。

麻衣は天変地異^{カタストロフイ}と呼ばれていた。そう呼ばれるのは強大な魔法の力を持っているからだった。

魔法の前では、どんな大量破壊兵器でも赤子の腕を捻^{ひね}るより簡単だ。
「麻衣。そんな顔するなって」俺はそう言いながら麻衣の脇腹^{わきばら}―脇の下らへん―をくすぐる。

「ひゃんっ!?!? なにすん…んあ、のよ」

「悲しい顔してただろ? だからだよ」と言って俺はくすぐるのをやめた。

「春樹。何回も聞くけれど私が怖くない、の?」

俺の顔を見てそう聞いてくる。よく見れば瞳が揺らいでいて眉とまつ毛を不安そうにゆがめていた。

「はあ。これで何回目だよ。……まあいい。何回でも言ってやる。」

美少女だし、怖くなんてねえよ」麻衣に軽めのデコピンをくらわす。

魔法に関して詳しく語る事にしよう。実はこの世界には昔、魔法を使う者は少数だが存在していた。

その時には、魔導書^{まどうしょ}と言うものが書かれて流通していたそうだが何処かの政府が暴動^{ばうどう}を恐れてなのかは昔の事なので知らないが、”異端^{いたん}”として狩られたそうだ。

魔導書も全て回収して、燃やそうとしたのだが燃やせなかったため地下に魔導書を保管して、厳重^{げんじゅう}な管理をしているそうで今ではごく

僅かな人間しか使えなくなった。

麻衣は、カタストロフイ天変地異として一種の異端として扱われている。それはなぜかと思う者がいるだろう。

麻衣の家系、血に魔導書の内容を刻んでいる。そこまでは別にいいのだが刻んでいる内容が半径10キロを廃墟にさせる、と強大すぎるものだったからだ。

魔法を使用するためには魔力というものが必要になる。それも麻衣の家系は膨大だったのだ。――俺も麻衣と同じくらいだが。

俺がなぜそういう事に詳しいかというと、俺は魔導書を回収した直系で天変地異の監視と暴走した際の鎮圧をするために、より強力な魔法を作って俺に無理やり教えたからだ。

「麻衣。ところで時間の方は大丈夫なのか」そう、そろそろ走らないと遅刻してしまう時間なのだ。

「えっ、ほんとだっ！ 急ぐよ、直樹っ」と言って麻衣は走る。俺も麻衣の後を追いつながら走る。

その時の俺は気付けなかった。俺と麻衣に次元転位魔法が掛けられていることに。

1話

なんとか走って間に合った俺たちだったが、同時に教室に入ったためかクラスの皆に見られる。

男子からは嫉妬、女子からは好奇心みたいなのが感じられるが無視をする。

「麻衣まい。なんとか間に合ったな」

少しだけ乱れていた息を整えてから隣に居る麻衣を見る。

「ええ、そうね」麻衣はあれだけ走ったのにも係わらず息すら乱れていない。——まあ、いつも魔力で肉体強化しているからな。麻衣は。

ふと、背後からピリツとした気配を感じる。——仕方がないのであいつに挨拶に行くことにする。

「おはよう。和也かずや」

「ああ。随分麻衣まいにご執念しゅうねんのようだな」

こいつは、俺の補佐ほさにして俺たちの監視役である峰矢みねや 和也かずやだ。

「麻衣はああ見えても可愛いところあるんだぞ」そう言いながら俺の魔力を中てる。

「……ああ、今日はたっぷり楽しんでおけよ」おかしい。いつもの和也はもう少しうるさいはずだ。

「何か隠してることがあるな」と耳元で囁いたら和也の身体が僅かに震えた。

「お前は気づいていないのか。魔力の歪みを」

その言葉を聞いた俺の背中を冷気が通り抜ける。先週からその事には気づいてはいた。どんな魔法なのかも。だがターゲットがわからなかった。

しかし、今の和也の言葉を聞いて確信した。——そのターゲットが俺達、俺と麻衣だと。

「ちなみに聞いておく。いつ発動するんだ？」

「お前、春樹の予想通りだと思う」今日の夜か。いまから解こうとしても間に合わないな。

——最善の策は一つ。ここの世界の座標を記録する事だ。

「俺と麻衣は学校を早退する。早退届けをよろしく頼むな」と言い残して俺は和也から離れて、麻衣と一緒に早退するぞ、と言って早退する準備をする。

俺が準備を終わって麻衣を見ると、どうやら終わったみたいだ。

「裏山に行くぞ」急ぐために俺は麻衣の手を握って走った。

「春樹、ちよっと待ってよっ！」待ってられない。急いで次元座標^イ目標魔法を俺と麻衣で作らなければこの世界に戻れる可能性が減るだろう。

「走りながらだが、聞いてくれ。今俺たちに次元転位魔法が掛けられていてそれが、今日発動する」

「う、嘘でしょ？」

「いや、本当だ。周りを見てわかると思うが魔力が既に形づくられているだろ？ 今からこれを破壊するなんて不可能に近い。だからここに次元座標^{フイ}目標魔法を仕掛けてから異世界に飛ばされる」

「私、そういう系統は知らないわ」

「そうか。じゃあ、帰ってこれる可能性が減るわけだ」

「私は戻れなくてもいいと思ってるの」

そんな話をしているとあっという間に裏山に着いた。

俺は周囲に人がいない事を確認するために、探査魔法^{サーチ}を飛ばしていい事を確認した。

「麻衣。俺は戻る、戻らないかは別にして次元座標^{フイ}目標魔法は仕掛けておいた方がいいと思うんだ」

「……そうね」麻衣の声が低い。たしかに麻衣にはこの世界はつらいだろう。

「異世界に行ったら思いっきり楽しもうな」

次元座標目標魔法を構成してあと数%という所で俺の携帯電話が鳴った。

こんな時に、魔法省——じじい——からかよ。俺は電話に出る前に構成を麻衣に頼むと聞こえないようにするため麻衣から離れる。

「——もしもし」

「天変地異と一緒に異世界に行け」
カタストロフ

「そうだな。お前たちは厄介払い出来ていいよな？」
やっかいばら

「おま、春樹。……いつから気付いていた？」魔法省のトップ——俺の祖父の声が低くなる。おそらく動揺を隠すためだろう。

「最初からさ。大体なんでコソコソして次元転位魔法を俺たちに仕掛けた？俺に最後まで気付かれないようにするためかよ」

言いたい事を言い終わった俺は祖父が喋る前に切って、電源を落とす。

ふう、と息を吐いて頭をクールダウンさせる。

「春樹、終わったよ」麻衣の突然の声にびっくりするが、なんとか表に出さないようにした。

「……ありがとな」そろそろだな。

「発動か。麻衣はぐれないように俺と手をつなごう」この状態の中でこういう事をするのはどうかと思ったが、まあいいだろう。やりたくても監視されていたからな。

「うん」麻衣の白くて、細い手が俺の手と重なる。手をつないでから気付いたが、麻衣の身体が震えていた。
カタストロフ

天変地異として恐れられている麻衣は、ふつうの女の子なのだ。

俺は麻衣の身体を優しく包み込むように抱いた。

「俺がいるから。大丈夫だから」

俺たちの身体を包み込むようにして次元転位魔法が発動した。俺たちが記憶している事はここまでだった。

——この日、俺と麻衣は異世界へ飛ばされた。

2話

ああ、新鮮な空気だ。異世界に来たのか。意識が戻ってからそう考えた。

それにしても、お腹に柔らかいモノが当たってるなあ。

「……うーん」

麻衣まいも気が付いたみたいだし、俺も起きますか。上半身を起こそうとすると麻衣の顔が下半身の方へ行って俺の精神状況によりしくないので手で押さえて、最終的には俺が麻衣を膝枕する形になる。

「おはよう、麻衣」

「春樹はるき、何してるのよっ！」その言葉と同時に俺の身体に電気が流れる。

「どちらかというと麻衣が俺のお腹に寝ていたからじゃないか」と俺はぼやく。

「そ、それは……。それより村とかを探した方がいいんじゃない？」

「ああ、そうだな」たしかに集落を探して衣食住を確保しないと何も始まらないからな。

殺気が俺と麻衣に中てられているが、麻衣は気付いていない。矢が数本俺たちに向けられて放たれた。

「麻衣、伏せろっ！」俺は後ろを振り返り、咄嗟ガードに初級防御魔法を発動させる。

矢は俺の初級ガード防御魔法に当たって燃えてなくなった。——矢を放った少年は驚愕きょうがくの表情に染まった。

「大丈夫か、麻衣」

「私は春樹が守ってくれたから大丈夫だよ。春樹はケガしてない？」

「俺の心配より自分の心配をしなさい」と言ってデコピンをくらわす。

「痛いよっ」麻衣はいつも俺のことになると自分より俺を優先して

くる。

それよりだ。俺達に矢を放った人はいまだに放心状態にあるのか固まっている。俺はその少年と話をするべく歩き出した。

「ひい。すみませんっ 命だけは！」声が裏返っている。

「なんで、そんなに怖がっているのかは分からないが。近くの集落まで案内してくれ」

「はひい。王族様の頼みならどんな頼んでください！」

「最初に言っておくが、俺達は王族ではない」異世界から来たなんて言うのと、頭がおかしい人に認定されると思いい言わなかった。

「いえ。王族で無かったとしてもあんな事をしてしまって……」

「俺は気にしてないから。気にしないでくれていい」

「そうですか」

「もう少し、砕けた口調でいいぜ。ええと——」

「わかった。俺はジュンだ。ジュンって呼んでくれ！」

「俺は師走^{しわす} 春樹^{はるき}。春樹の方が名前だから、よろしくなジュン」そういつて俺はジュンと握手を交わす。

「こっちこそよろしくな、春樹！」

「天地^{あまち} 麻衣^{まゐ}よ。——ジュン。さっき春樹にケガさせようとしてたわよね？」麻衣から魔力が溢れ出す。

「麻衣、俺は気にしてないから」俺は麻衣を宥めるが効果がない。ならば……！

「俺は麻衣に人を傷つけて欲しくないんだ」と言いつて俺は麻衣を抱きしめる。

「ちよっと、春樹っ？ 恥ずかしいからやめてよ」

収まったしそろそろいいかな。

「ジュン。案内よろしく頼む」

「ああ、わかった。俺の住んでいる村に案内するぜ」

どれぐらいの時間歩いたのだろうか。太陽が沈み月が顔を出してから辺りの魔力の濃さが変わった。

この世界は月が魔力と関係しているのだろうか。

「いつになったら着くんだ？」

「このまま行けば明日の昼ぐらいには着くぜ？」明日の昼か。――麻衣を見ると、明らかに疲れが溜まっていた。

「少し休んでいいか？」

「ああ、いいぜ。まあ着くのが遅くなるだけだからな」

俺は非常時のために個人空間に入れていおいた荷物の中からレジヤ―シートを取り出して敷く。

「麻衣が肉体強化を使っていないなんて珍しいな。なんかあったのか？」

「しばらくは魔法を使わないって決めたの」

「そうか。それにしても大丈夫か？ 疲れてるんなら魔法使うけど

……」

「大丈夫よ。――それに決めたんだから。魔法に頼った生活はやめるって」

そうか、と短く答えて俺は空を見上げる。

地球で見たような星座はどこを見ても見当たらない。更に見たことも無い色をしている星もあった。

「春樹、俺に魔法を教えてくれ」

「とりあえず着いてからでもいいか？ 俺も一眠りしておきたいからさ」

「ああ！ 教えてくれるならいいぜっ！」少年のような笑顔だった。
監視魔法サーチャーを飛ばしておくか。俺たちに害を与えるものが接近した時に俺の右腕に静電気ぐらいの電気が走るのだ。――これが結構痛いんだぜ。

さていったん寝ますか。

3話（前書き）

予定より遅くなっていました、すみません。

3話

右腕に電気が走った。

「ちっ」俺は舌打ちをしながら上半身を素早く起こして周囲を見わたす。

「春樹も気付いたのか」はるぎ見るとジュンは武装していた。

「まあな。ジュンよりも遅かったが」この魔法は改良の余地ありか。

「やばいぜ、春樹。あれは、ここらへんを纏めてるボスだぜ」

よく見てみると虎を大きくしたような感じのモンスターがこちらに近づいていた。

「そうか。ここらへんを焼け野原にしても問題ないか？」

他の人だったならば小規模、中規模魔法で済んだだろう。しかし俺は天変地異に対抗すべくつくられたいわば兵器のようなものだ。

「ようは、野原にするかボスを倒すかどちらかを選べって事だろう！
そんなの決まってるんだろ。――ボスを倒す」

「水晶。時間が進むことのない空間、そして砕けると共に分解される」

言葉としてはなっていないだろうがこれが俺なりの詠唱だ。詠唱はただ魔法のイメージを固めてるにしかすぎない。

自転車の補助輪のようなものだ。必ずしも必要ではないが脳の活動が低い時に俺は使っている。イメージするのに脳活動が低ければ何も出来ないからな。

魔法を完成させるためにはイメージの他に魔力が必要だ。それがなければどんなにイメージしても完成しない。

そんなことをしているうちに、ボスが水晶になり始めていた。――この魔法を実戦で使ったのはこれが初めてだったが、威力が高すぎる。

「すげえ、あんな魔法を見たのは初めてだぜ！」

この世界にある魔法と俺の使っている魔法体系が違うのか。そう

じゃないにしてもなるべく魔法を使わない事にしよう。

ふと俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「怪我とかしていない!？」

「そんなに触るなって。大丈夫だよ、どこも怪我なんかしてないって。な、麻衣？」

「そ、そう。それなら良いんだけど……」もしかして俺の魔力に反応して起きたのか？

「起こしてしまつてごめんな」

「ううん、気にしないで。それに私何もしていないから」

それにしても、あのモンスターから生気が感じられなかった。――

――何者かに操られているような、とそこで俺の思考が止まった。

「……操られている？」

「春樹、どうした？」

ジュンと麻衣は俺の雰囲気の変化に気づいたのか神妙な表情を浮かべた。

「――いや、気にするな」

まだ、言うべき事ではない。少なくとも今はな。

「しばらくの間は大丈夫と思うがボスの仇を討ちに来ると思うんだが」

「そうね。ジュン、案内してちょうだい」

「わかったぜ」

東であろう空が明るくなってきた。夜が明けようとしているのだ。俺は眩しくてつい目を閉じてしまった。

「なっ!」ジュンは驚愕したような表情と共に声を。

「は、春樹……」麻衣の声が震えていた。

「どうしたんだ――」言葉を続けようとしたがやめた。

太陽の脇の方に黒い物体があった。

「あのじじいっ! 俺たちを飛ばさせておいて拳句の果てにはこの世界でも俺たちを消すつもりなのか……っ!」

「この世界でも？ 春樹どういふこと、なんだよ？ 説明してくれよ……」

「――俺は、俺たちはこの世界の人間じゃないんだ。別の世界から来たんだ」

これが今の状況での最善策だと思った。

ジュンが別の世界ってどういうことだ、と聞いてきた。

「じじ、俺の祖父の陰謀によって俺と麻衣は転位魔法に巻き込まれてこの世界にやってきたんだ」

「なんかよく解らんが、転移魔法って凄いなっ！」ジュン。君っていう奴はなんて扱いやすいんだ。

「信じてくれたのか？」俺は思っている事を素直に言った。

「ああ、お前らが嘘をついている様には見えなかったからな！」純粋な笑みを俺たちに向かって浮かべた。

「ねえ、春樹見てみて！ あそこに家があるよっ！」

麻衣は家を見つけたからかはじゃいでいた。そんな姿を見て俺はドキッとした。

「ああ、そうだな」

「あそこが俺の住んでいる村だ、あそこまで誰が一番に着くかやってみようぜ？」と言ってジュンは走った。

「ちよっと、待ちなさいよっ！」

さて、俺も歩きますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0345w/>

天変地異と俺～異世界へようこそ～

2011年11月14日03時31分発行